

Title	市原レポート：いちはらアート×ミックスへ向けた取り組み
Sub Title	Ichihara report : efforts toward Ichihara art×mix
Author	坪井, 聡志(Tsuboi, Satoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2017
Jtitle	哲學 No.138 (2017. 3) ,p.151- 174
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：アートベース社会学へ#寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000138-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

市原レポート

——いちほらアート×ミックスへ向けた取り組み

——坪 井 聡 志*

Ichihara Report

——Efforts toward Ichihara Art×Mix

Satoshi Tsuboi

1. Preface
2. What is Naka-Boso International Art Festival Ichihara Art×Mix?
 - 2.1. General situation of Ichihara-shi and Ushiku shopping street.
 - 2.2. Ichihara Art×Mix
3. Efforts of Keio ABR toward Ichihara Art×Mix
 - 3.1. Efforts until now.
 - 3.2. Process of planning proposal
 - 3.3. Lyricalization of oral history
4. Conclusion

Key words: art festivals for problem solving, population problem, oral history, trace what is dictated, lyricalization

* 慶應義塾大学社会学研究科修士課程1年

1. はじめに

本報告はすでに公募の段階を終え、現在は参加団体を審査中のアートフェスティバル「中房総国際芸術祭市原アート×ミックス 2017」(以下アートミックス 2017) へ向けた、ABR 研究会の取り組みを報告するものである。後述するように、アートミックスは千葉県市原市を舞台に、人口減少や少子高齢化といった問題が特に顕著である市原市南部地域の資源を生かし、再発見することで地域を活性化することに主眼をおき開催されるアートフェスティバルである。

ABR 研究会はアートミックス 2017 への取り組みとして、『10 の小品・牛久——きおくうた——』と題した作品の制作を行っている。その内容を簡潔にまとめるならば、千葉県市原市牛久にある牛久商店街で商店を営む人々から聞き取ったオーラル・ヒストリーを歌詞化し、歌詞化したオーラル・ヒストリーを音楽家河崎純氏の協力のもと、さらに歌曲化する、というものである。完成を目指す曲は商店のテーマ曲 10 曲(ゆえに 10 の小品である) + 全体テーマ曲のあわせて 11 曲。完成した曲は、地元の人々の声によって歌われ、アートミックス 2017 の会期中には、老若男女問わず公募した地元住民からなる歌い手による発表公演も地元で開催される。またそれと並行して、牛久商店街での聞き取りや牛久商店街の環境音(小湊鉄道や毎年7月末に開催の八坂まつりの音など)をベースにしたサウンドアートの制作もおこなう。上総牛久商店街プロジェクトの詳細は本誌別掲のアートミックス・プロポーザルを参照してほしいが、ここでは作品の重要なコンセプトだけ、重複となるが提示しておきたい。

牛久商店街に生きる人々が《まちのきおく》を歌うことで、街の歴史が他者に開かれ、新しい息吹を吸い込みながら歌い継がれていくこと——。これが私たちのコンセプトである

牛久商店街に暮らす商店経営者やその家族には、それぞれに「生きた歴史」がある。私たちは、小湊鉄道線の発展とともに栄えた昭和の商店街の暮らしを中心に、彼・彼女らの歴史物語を聞き取り、それらを歌詞にし、曲をつけ、歌にして共にうたう。私たちのアート作品は、そうした「歴史実践」から生み出される

そこに生きる個々人の歴史が町の歴史や社会状況と結びつき、語られる。重ねてきた日々《きおく》と批評性《社会》が交じり合った「歴史実践」。そしてその歌が町の空気へ溶け出し、だれに届くとでもなく、しかし、たしかに届きながらどこまでも響いていく。そのような作品作りを私たちは目指している。

プロジェクトの主要メンバーは慶應義塾大学文学部教授岡原正幸、後藤一樹（同大学文学部非常勤講師 [2017年度より]）、高山真（同大学文学部非常勤講師）、ありな・プルサコワ（同大学社会学研究科修士課程）、そして執筆者（同大学社会学研究科修士課程）の計五名である。この他の研究会メンバーもプロジェクトに積極的なフィードバックをもたらしており、研究会全体で本プロジェクトに臨んでいる。

本報告は、まずアートミックスというアートフェスティバルがどのようなものなのかを説明し、その後に ABR 研究会の現在までの取り組みを紹介するという順番になっている。

報告に入る前にここで本プロジェクトの協力者である河崎純氏について簡単にではあるが紹介しておきたい。執筆者は立教大学在籍時に履修していた批評家・哲学者青木純一文学部特任教授が開講している文学部文学科文芸・思想専修の講義、演習 F29・演習 F30 で、ゲスト講師を務めている河崎氏と出会った。当講義の目的は文学作品を朗読と演劇的表現をもちいて読解するというものであり、最終講義では河崎氏が書いた戯曲をもとに音楽と朗読をもちいた音楽劇を発表する。この活動に見られるように河

崎氏はプロフェッショナルな技術だけによらない、さらには楽譜だけでもよらない音楽の可能性を模索しており、国内外で広く活躍されている（詳しい経歴はプロポーザルの経歴欄を参照してもらいたい）。今回、河崎氏の「人それぞれの生き方それ自体を作品に反映する」、「いまここにいる人たちでなにができるのかを考えながら創作をおこなう」という姿勢と、オーラル・ヒストリーや ABR 研究会の姿勢との間に関連性を感じた執筆者が河崎氏に依頼するという形でコラボレーションが実現した。

2. 中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックス

(1) 市原市および牛久商店街の概況

ここからはアートミックスの概要を紹介するが、その前にアートミックスの舞台となる千葉県市原市がどのような場所なのか、そして私たちが舞台とする牛久商店街がどのような場所なのかを簡単にではあるが紹介しておきたい。

千葉県市原市は面積 368.17 平方キロメートル、東京湾から房総丘陵までがふくまれ、距離にして東西約 22 キロメートル、南北約 36 キロメートル。北は千葉市、南は君津市、大多喜町、西は袖ヶ浦市、木更津市、東は長南町、長柄町、茂原市に隣接し、千葉県のほぼ中央に位置する県最大の市である。戦後大規模な市町村合併が進む中、昭和 38 年五井、市原、姉崎、市津、三和の 5 町が合併して市原市が誕生し、さらに昭和 42 年 10 月、南総町、加茂村が合併して一郡一市からなる現在の市原市の姿が形成された。人口は 2016 年 3 月時点で 280,808 人（「市の概要」）。北西の東京湾臨海部の石油化学コンビナートは京葉工業地帯の中核をなし、製品出荷額等は愛知県豊田市に次いで全国 2 位と市原市の産業を支えている（「産業白書平成 27 年版」）。工業のみでなく「養老川、村田川、椎津川の 3 つの河川流域には、山地・丘陵地、溪谷、台地、谷津、水田、河川・湖沼、河口の干潟などの多様な自然環境が」広がっており、秋には紅葉をもとめ

て多くの観光客で賑わう養老溪谷があるなど観光もまた主要な産業の一つとなっている（「市原市緑の基本計画2章市原市都市特性及び緑の現状と課題」：16）。

牛久商店街のある上総牛久駅には、小湊鉄道に乗ることでアクセスできる。五井駅から上総中野駅までを結ぶ小湊鐵道は大正6年に設立。昔ながらの二両編成の趣のある車両をもち、その車窓からはのどかな田園風景を望むことができる。小湊鐵道では最近トロッコ列車の運行が始まり、窓のないその新車両からは市原の風景を思う存分楽しむことができる。駅から出るとアーチがかかった商店街の入り口があり、そこからT字に小湊鐵道沿線で唯一残っている商店街が広がっている。アーケード商店街の方式が採用されているわけではなく、国道297号線上の左右に店舗が立ち並んでおり、その道沿いでは規模は縮小したものの毎月3と8のつく日には現在もまだ朝市が開かれている。7月末には会期中の一定時間道路を通行止めにして、八坂まつりが開催される。多くの人たちや露店でにぎわうこの祭りでは、山車の上で市文化財「牛久ばやし」が子供たちを中心として演奏される。牛久商店街は大きくわけて下町・中町・上町（下宿・中宿・上宿）の三町からなっており、山車もそれぞれの町ごとに地元の氏子（若衆）の先導のもと出されることになっている。また、毎年8月と12月には和光大学の協力のもと「うしく光とアートのフェスティバル」と題したナイト・パザールも開催されており、牛久商店街は地域の活性化にひときわ力を入れているといえる。

そんな市原市そして、牛久商店街ではあるが、特に牛久商店街が位置する南部地域においては人口減少や少子高齢化が進んでいる現状がある。

昭和32年から始まった臨海部への企業進出により、かつての農村漁村は工業地区に変わり、北部地域では、首都圏で働く人々のベッドタウンとして人口急増が進んだ一方、里山や緑豊かな自然が残る南部地域では、過疎高齢化が急速に進

んでいます。このような日本の縮図ともいえる発展をしてきた市原では、首都圏の都市が同様に抱えている多くの問題が顕在化しています（「いちほらアート×ミックス ホームページ」）

市原市の全人口は少子高齢化や転出超過等の影響で、2003年をピークに減少傾向にあり、試算によれば「平成27年の住民基本台帳を基に、現状のまま推移すれば10年後の平成37年には現在およそ28万人いる人口はおよそ26万5千人に、平成72年にはおよそ17万2千人に減少することが見込まれ」ている（「市原市人口ビジョン概要」）。人口分布には地域ごとに（市原市は10地区からなる）ばらつきがみられるもののいわゆる南市原¹⁾と呼ばれる南総地区、加茂地区では特に人口減少と高齢化が進んでいる（「市原市人口ビジョン（分割版）」）。牛久のある南総地区の10年前の2006年8月1日時点での総人口は、28,283人であったが、2016年8月1日時点では総人口は23,786人とおよそ4500人減少している。また、65歳以上の高齢者率も2016年8月1日時点で36.3パーセントと、15歳未満の年少人口が7.5パーセントなのに対して非常に高い数値を示している（「年齢別人口統計（地区別）南総地区2006年8月/2016年8月」）。

牛久の2016年8月1日の町別年齢別人口統計だけを見ても、全人口1933人に対して65歳以上の人口は673人全人口の3割以上を占めており、それに対して15歳以下の人口は163人と全人口の1割未満にとどまっている。また、牛久の全人口は、10年前の2006年8月1日時点で2208人だったのに比較すると確実に減少していることがわかる（「年齢別人口統計（町丁字別）2006年8月/2016年8月」）。また、聞き取りによって得られた情報でも、人口減少・少子高齢化に加え、数少ない若者は千葉市や東京都に流出傾向にあり、商店の跡継ぎがいない、といった現状や、国道と大型量販店の登場にともなう商店街の衰退でそもそも跡を継がせられないといった現状が明らかになっている。

アートミックスはこうした社会背景から生じる種々の問題を解決するための「課題解決型芸術祭」として開催される。その概要については次の節で見えていくこととする。

(2) いちはらアート×ミックスとは

アートミックスは2014年に初めて開催され（会期は3月21日から5月11日までの52日間）、私たちが公募しているアートミックス2017で2回目の開催を迎える。アートミックスと同じく地方都市を舞台とした芸術祭である「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」、 「瀬戸内国際芸術祭」を手掛けてきた北川フラム氏を総合ディレクターとして迎え、上述してきたような市原市南部地域の、人口減少・少子高齢化にもなっており起きている種々の問題をアートの力をもちいて解決するための「課題解決型芸術祭」となることを目的として運営されている。「晴れたら市原、行こう」を合言葉に、「①廃校の活用、②小湊鐵道・乗物の活用、③豊かな自然と食、④アーティストの長期的な活動や異業種からの多様な人々の参加という4つのコンセプトで、南いちはらの新たなまちづくりに挑戦したものである」（「中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス 総括報告書」: 1）。

アートミックス2014の一般公募では101点の公募の中から10点が選抜され、13各国から合計66組のアーティストが参加した。会期中の来場者数は、延べ87,025人と目標来場者数20万人には遠く及ばなかったものの、後述するように外部地域からの来場者の割合が多く、会期中の南市原地域の交流人口が増加したのは事実である（同前）。以下では、IAAESと小湊鐵道月崎駅で実際に展開された（されている）作品を紹介しつつ、アートミックスの特徴について紹介する。

2013年、南市原では4つの小学校が廃校した。それをうけて「「いちはらアート×ミックス」では、この学校を活用したアートプロジェクトを実

施することにより新たな地域のプラットホームを創出し、文化的活動を通じたまちづくりを始める」(同前: 31) というコンセプトを打ち出しており、IAAES (Ichihara Art/Athlete Etc. School 旧里見小学校), 旧白鳥小学校, 月出工房 (旧月出小学校), 内田未来学校がアートミックスの舞台となった。

IAAES は 2013 年春に廃校となった小学校の一つである。ここでは、地域の人々だけでは守ることのできない学校を、芸術・スポーツ・農業を通じてよみがえらせることが目指されている。たとえば、小沢敦志による作品『地熱の扉』は、「直径 10 メートルもの巨大な岩のような鉄の彫刻を、年月をかけて作り上げていく計画」であり、「市原市内で収集された日用品から産業廃棄物にいたるまで多様な廃鉄を熱し、叩き、再構築していく」プロセスそのものを作品化したものである (北川他 2014: 38)。2014 年の段階では IAAES に作品創作のための工房が設置され、2020 年の作品完成を目指した長期的なプロジェクトとなっている。来場者は制作過程を間近でみることができるとともに、「アートいちほら 2016 春」という会期外イベントでは、実際に鉄を叩いて制作を体験できるワークショップも開催された。また、角文平の作品『養老山水図』は「教室全体に並べた机に市原の地形を木版画の要領で彫り込む作品」である。こちらの作品も長期的な制作を見越したものであり、2017 年に教室全体を使ったインスタレーション作品として完成する予定である (同前: 38)。これら二つの作品以外にも、教室をもちいた作品が数多く展示され、役割を終えた教室が新たな広場として生まれ変わり人々を引き付けている。次に小湊鐵道を利用した取り組みをみていく。

小湊鐵道は車社会化が進んだ現在でも、市民の重要な足であり、同時に観光の要でもある。沿線の駅はどれも都市部の駅にはない趣を持っており、月崎駅もそんな駅のうちのひとつだ。月崎駅のすぐ近くには、木村崇人の作品『森ラジオステーション』が佇んでいる (展示されているというよ

りもこの表現のほうが適切と思われる)。『森ラジオ』は小湊鐵道のかつての詰所小屋を苔と山野草で覆った作品であり、したがって、その外観は季節の移り変わりごとに変化していく。また、建物の内外に仕掛けが施され、そこにつどった人々は「自然と人の関係を見つめなおす」（同前：54）。月崎駅に降り立った人々は、駅周辺の環境と溶け合った『森ラジオ』の不思議な外観に自然に引き寄せられて、これはいったい何なのだろうと建物の周りをぐるりと回る、すると鳥の声や草のにおいが身体にゆっくりと染みわたってくる。『森ラジオ』は地域住民が立ち上げた管理団体「森遊会」によって植物が手入れ・維持管理されているという点も特徴の一つだ。作者の木村はアートミックスの参加アーティストやスタッフを交えた対談の中で以下のように語っている。

作品自体、毎日変化するのです。この「日々の変化」が多くの人を楽しく巻き込んでいったのではないかと思います。地元の皆さんは……人が見に来ることが喜びのようで、さらに見に来た人も関わりたいとネットワークが広がっていった、駅の雰囲気も変わってきたそうです

農家の人は、畑の野菜が日々変わっていくことに楽しみを見出しますよね。あの作品（『森ラジオ』）も芽吹いたり、つぼみをつけたりどんどん変わっていきます。それは会話の変化を生むし、常に面倒をみなくてはいけないから、それまで話をしなかった人たちにも会話が生まれてくる（同前：102）

また、『森ラジオ』は2016年公開の映画『星ヶ丘ワンダーランド』（柳沢翔監督作品）のロケ地にもなっており、今後も注目を集めることが予想される。

まとめよう。上に紹介した作品はいずれも現在進行形の作品であり、その場限りで展示されて終わり、という類のものではない。『地熱の扉』

『養老山水図』は作品完成の途上にあるし、完成後も作品はIAAESで展示されていくことになるだろう。『森ラジオ』は、季節ごとにその表情を変えていく。それに地域によって植物の手入れ・維持管理が継続的に行われていくという点においても、この作品は半永久的に継続していくといえる。この点にいちほらアート×ミックスの特徴が表れている。運営という点からみても、アートミックスの会期中以外に、「アートいちほら 2015 秋・春」、「アートいちほら 2016 春」と題したイベントが開催されており、「葉の花プレイヤーズ」²⁾と称されるアートミックスサポーターたちとともに次回会期に向けて積極的に足がかりをつくっている。南市原が直面している少子高齢化・人口減少という課題は一度芸術祭が開催されたからといって即時に解決されるものではないが、来場者アンケートによると、アートミックス 2014 への市原市外からの来場は 76.0%、千葉県外の来場は 47.3%（内訳は東京都、神奈川県、埼玉県の順に多く、首都圏からの来場者が多かった）。この数字は会期中に地域外から訪れる人の数（「交流人口」）を増加させるのにアートミックスが一定の役割を果たしたことを示している（「中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックス 総括報告書」）。

ここで、私自身の経験についても一つ書いておきたい。アートミックスは、参加型のワークショップが多いことも特徴の一つといえる。私たちは、アートミックス見学会の際に、「アートいちほら 2016 春」が開催されている IAAES を訪れた。多くの子供たちでにぎわっている場所に近寄ってみると、吉田和司によるワークショップ『吉田事物屋』が開催されていた。『吉田事物屋』は不要になったストーブや携帯といったモノを分解して中身を取り出し、それを作品として展示するワークショップである。一生懸命にプリンターを解体していた小学校低学年くらいの子供たちに近寄って様子を見ていると、「これどうすればいいと思います?」と問われ、私も少しではあるがワークショップに参加することになった。どうやらプリンターというのは力づくでは解体できないらしい。適切な手順を踏まな

ければきれいに解体できないのだ。子供たちといろいろ意見を交わしている内に、作業に夢中になり興奮している自分に気が付いた。普通に生活していれば話すことはないほど年齢が離れ、生活圈も違う人との間に交流が生まれるということ、身をもって実感したのである。

この私の経験や、先に引用した木村の対談でのコメントにも表れているように、アートが今までつながっていなかったものの中につなかりを生む契機となり、地域を活気づけていく。さらに、継続性をもったアート作品とともに、継続的にアートミックスが開催され、人々のつながりが重なっていけば、アートによって地域内外の人々を引き付ける、魅力ある場所として南市原地域が再創造・再発見されるということは大いにありうるだろう。では、このようなアートミックスのコンセプトにいかにか私たちの提案する作品が寄与しうるのか、それは次章で見ていくこととしたい。

3. ABR 研究会の取り組み

(1) 現状までの取り組み

本章ではアートミックスへ向けたABR研究会の取り組みの概要を記す。これまでみてきたようにアートミックスの最重要課題は、少子高齢化・人口減少が進む市原市南部地域に生じる種々の問題をアートの力をもちいて解決する「課題解決型芸術祭」となることである。総合ディレクター北川フラム氏は私たちが参加した現地見学会で、そういった課題に言及しつつ「市原の資源を発見できる、力のあるアーティストを求めている」と述べていた³⁾。そこで、ABR研究会はオーラル・ヒストリー研究の視座から「そこに生きる人々の生きられている（生きられてきた）歴史こそが最も重要で豊かな資源である」という立場に立ち、牛久商店街に生きる人々の歴史を聞き取り、音楽家河崎純氏の協力のもと音楽作品（アート）として再構成することとした。ここでは、私たちのプロジェクトが、現在の形に至るまでのプロセスについて提示することとする。それはまた、私たちの

プロジェクトとアートミックスのコンセプトが一致していると示すことにもつながるだろう。

現在までに牛久商店街へは、2016年の5月に2回、7月の八坂まつり期間の2日間、8月に1回実際に足を運び、商店街に暮らす人々と交流したうえで、オーラル・ヒストリーの聞き取りを進めている。調査メンバーの面々はその時々によって変わるのだが、前章で紹介したメンバーのうち2名ないしは3名が共同で牛久商店街へと赴き、企画書を配布の上、企画趣旨の説明や聞き取りを行っており、今後もその形で継続的に企画準備を遂行する予定である。記録媒体としては、録音と映像、写真をもちいより多角的に上総牛久商店街の姿を記録すると同時に、私たち自身の営みを反省的に見直す契機としている。現時点では商店街の理事会の協力のもと、時田酒店、総合衣料大山（衣料品店）、大津屋（旅館）、木村家そば店にて聞き取りを行っており、また深山文具店とは聞き取りを行う約束をとり交わしている。

さらに、聞き取りの内容を歌詞化し、歌曲化するという作業も現在進行中であり、総合衣料大山と大津屋に関してはすでに歌詞を完成させている段階にある。大津屋の女将からは私たちが作った歌詞を歌曲化する許可をすでにいただき、現在は河崎氏に作曲を依頼した段階にある。また、商店街が一番の賑わいを見せる7月の八坂まつりの際には、インタビューのほかにも、小湊鉄道の音や祭囃子、祭りの賑わいを録音と映像によって記録し、サウンドアート作品の制作の準備も進めている。ここでは特にABR研究会の取り組みとして、オーラル・ヒストリーを歌詞化するという試みについても紹介したい。

(2) 企画に至る経緯

アートミックス公募企画立案の初期段階では以下のような内容、コンセプトを想定していた。以下は後藤を中心として立案していた初期の企画コ

コンセプト案の概略である。

小湊線ではほぼ唯一の商店街といえる上総牛久商店街の歴史を、オーラル・ヒストリーの手法で掘り起こし、写真・テキスト・音楽をミックスしたパネルによって表現する。各商店で働く店員（経営者やその家族）に複数回のインタビューを実施し、小湊線の発展とともに栄えた60年代から70年代の商店街の暮らしを中心に、家族の歴史を約100年スパンで聞き取り、その歴史物語を一店の店舗につき一枚のパネルにテキストとしてまとめる。

テキストの上には、対象者が最も大切にしている商店街あるいは当商店の家族の歴史にまつわる写真を掲示する（あるいは、我々がその商店の人たちの生活写真を撮ってもよい）。音楽家の河崎氏に、以上のような商店の歴史物語、生活風景、現場から得たインスピレーションをもとに、各商店のテーマ曲を作曲、コントラバスで演奏していただく。アートミックス展示期間には、（もし会場があるならば）パネル10枚が並べて展示され、各テーマ曲の同時再生とともに、バイノーラルで録音された小湊線の電車の音が環境音として流れる。真の目的は、アートミックス展示期間が終わってからはじまる。毎日の商売のなかで、アートパネルを店先に置き、各商店のテーマ曲を店先で流してもらうのである。コンセプトは、「商店街に立ち寄った人間が、店の歴史を見て、読んで、聴いて、店の人と話したくなり、買いたくなるアート」である。「顔と歴史の見える／聴こえる商店街」として上総牛久商店街が話題を呼び、集客力が向上することを期待している。

企画の内容に関して言うならば、上総牛久商店街に暮らす人々の生きてきた歴史を聞き取り、それをアートとして作品化する、その際に河崎氏の協力のもと各店舗のテーマ曲を作曲するという点以外は現在の姿と大きく異なっている。また、この時点におけるテーマ曲とは歌詞つきの歌ものではなく、あくまで河崎氏によるコントラバスの独奏、あるいはコントラバ

スと他の楽器のデュオを想定したものだ。しかしながら、牛久商店街に暮らす人そのものを重要な資源と考え、それらの人々の生きてきた歴史を作品化するというコンセプトに関しては、現在の企画と変わりはないこともまた強調しておきたい。

この時点で商店街理事会との交流を持っていたこともあり、あくまで「商店街に立ち寄った人間が、店の歴史を見て、読んで、聴いて、店の人と話したくなり、買いたくなるアート」という合言葉のもと、実際に購買につながるようなアート作品を提示しなければならないという感覚が企画主要メンバーの中で共有されていたこと、社会学的な視座のもとでアート作品を提示することがどういった可能性を持っていて、どこまでが社会的であると言い切れるのかがわからないという迷いがあったことが、当企画を上述のような案で立ち止まらせていたということができる。だが、果たしてこのままの企画案を進めていくことが商店街を少しでも活気づけることにつながるのかという迷いや、単純に音楽をもちいて人々のオーラル・ヒストリーを彩ることが、オーラル・ヒストリーをアートとして提示する最善の形なのだろうかという迷いがメンバーの中にうまれていたこともまた事実であったように思われる。

そんな中、牛久商店街のマップを作るなどして商店街を積極的に活気づけようとなさっている深山文具店のご主人から以下のような言葉をいただいたことを私は思い返していた。

外回りをするクリーニング屋さんから聞いた話なのだけれど、アート×ミックスに関わってから出てくる話題が大きく変わった。アート×ミックス以前は「誰々が亡くなったから、この町から出ていく」という暗い話題ばかりだったが、アートミックスに関わってからは、「自分はこんなアートに参加したんだ」という明るい話題が出るようになった。これは外回りの仕事をする人ならではの視点だと思う

つまり、牛久商店街の人々が求めているのはただ単に「商店街に立ち寄った人間が、店の歴史を見て、読んで、聴いて、店の人と話したくなり、買いたくなるアート」、購買につながるアートではなく（もちろんそれは重要な事項ではあるが）そこに参加することで自分の生活が生き生きと活気づくような、そんなアートなのではないか。先にも述べたように、実際に訪れた「アートいちほら 2016 春」の会場では、参加型のワークショップに子供たちが生き生きした表情で参加する姿が数多くみられ、相互行為としてのアート、参加型アートという形式が企画を成功させるキーになるのではないかという議論が研究会内でもなされていた。参加すること、そのことによって参加するその瞬間が、そしてなにより参加者自らの人生がより豊かになるアートが必要とされているのだと思いついたのである。

そんな気付きの中、河崎氏から「オーラル・ヒストリーを詩（歌詞）に変換しそれが歌になって行く。そして語り部自身や地域の方々が直接そのプロセスと創作に関わり、作品として発表（公演）するというのはどうだろうか」という助言を受けたことが企画を動かす大きな契機となった。オーラル・ヒストリーを音楽と一体化させ、アートとして再構成する。これは、私たちの研究会のメンバーがその当初念頭に置いていたコンセプトを初期案よりも、より適切な形で表現できるものである。さらにいうのならば、「語り部自身や地域の方々が直接そのプロセスと創作に関わり、作品として発表（公演）する」というのは参加型アートの可能性を検討していた研究会にとってまたとない提案であった。前章で述べたように、アートミックスの要諦は地元住民同士や、外部の者同士、あるいは地元住民と外部の者のかかわりの中で、生まれる活気にこそある。その活気を生み出す、あるいは活気から生まれてくるアートこそ、「課題解決型芸術祭」としてのアートミックスに求められているものである。作品の生成プロセスのなかで、普段は関わり合いの少ない、年齢も性別も趣味嗜好も異なる地

元の人たちが交わる。さらに、そこに私たちが交わる。その中で作り上げられるアートが、来訪者にむけて歌われ、歴史が他者へと開かれることで、外部と交わる契機を生む。

この企画案にさらに、牛久商店街の環境音やインタビューの音声をベースにしたサウンドアート制作という試みが追加された。河崎純氏は先にも紹介した通り、数々の楽曲、舞台を手掛けてきたほか、学生を対象にしたワークショップも数多く行ってきており、特に楽譜だけによらない、またプロフェッショナルな技術だけに拠らないその場で即興的に立ち現れるあるいは、その場だからこそ立ち現われうる、そんな音楽の可能性を模索されている。そんな河崎氏だからこそその提案と私たちの手法・コンセプトが出会う形で本企画は現在の姿をとるにいったのである。

(3) オーラル・ヒストリーの歌詞化という試み

本節では、歌曲化の許諾を得ている大津屋の女将への聞き取りから生まれた歌詞を例にとり、オーラル・ヒストリーの歌詞化という試みがどのような点に留意しておこなわれたか、どのような試みであるのかを紹介することとする。作詞は、執筆者を中心として、研究会メンバーの意見を取り入れつつおこなわれた。まずは、以下に大津屋の歌詞を引用する。

いろんな人が泊っていった
商人、問屋に、薬売りに、兵隊に
女中もいっぱい抱えてて
それはもう賑やかだった
馬車が通り、車が通る
砂煙が舞い活気を連れてくる
そうよ、そういう街だったの

いろんな女中が働いていた
身内のいない売られた娘
戸籍もなく花街転々と
辿り着いたのはここの宿
家族のように暮らしたの
最後に看取ったこの私
そうよ、今世の縁なのだから

田んぼに行って寝そべて
竹やぶにいて櫓を組んだ
扇風機なんかなかったから
そこで仲間と涼んでた
田んぼにいて寝転んで
歌を歌ったりなんかして
そうよ、そういう時代だったの

一合五勺ずつの米
持ってきた人にだけ炊いてだす
私はまだ子供だったけど
ほんとうに物がなかったの
空襲警報が鳴ると
軍人さんと一緒に防空壕に入る
そうよ、大変な時代だったの

いろんな人が泊っていった
人との触れ合いが楽しくて
メールなんてなかった時代

今の人たちは愛に飢えてる
みんな孤独でさみしいの
だから私は温かく迎えるの
そうよ、旅館を死ぬまで守る

いろんな人が泊って行った
のどかな時代の、のどかな出来事
物がない時代もしのぎ切って
戦争終わってほっとして
私はこうして生きぬいて
そうよ、大変だったけど
今も旅館を守ってる.

作詞：坪井聡志 with ABR 研究会

私が大津屋の女将のオーラル・ヒストリーを歌詞化する際に心がけたのは、この歌詞を歌う歌手（歌手は語った当事者だけではなく、老若男女問わず地元で暮らす人たちの中から公募する）が、女将という人をなるべくそのままの形で「なぞる」ことができるような歌詞にするということであった。ここで、歌手がなぞることができるように仕向けられなくてはならないのは、単に女将の経験や記憶のみにとどまらず、女将の人柄や雰囲気も含めた、まさしく女将全体である。あらゆる事柄は女将その人を通して経験される。なぜならば、女将は単なる情報を集積する機械などではなく、彼女自身が経験し、記憶する生きた人間であるからだ。であるから、女将という人の人柄や雰囲気をなぞることなくして、女将の経験や記憶はなぞられえないと考えられる。

では「なぞる」ことはどのような契機を含みうるのか。石野（2015）

は、「ある人物の語りをそのまま、なぞるように再現したものを「聞きなぞり」と定義」（石野 2015: 104）したうえで、聞きなぞりでは、「起きた出来事を仲間と一緒に「トレース」することで、現場の空気を再現することに近づく。その人を「代弁」してしまう可能性と責任を引き受けながら演じることで、未知なる他者を頭での理解とは異なる方法で理解するように努める。そのプロセスにおいては、自己相対化と自己変容が促される」（同前: 106）と主張する。さらに、石野は語られた内容を他者が聞きなぞることで、「私的に閉じられがちな経験を開き、受け止めやすくする作用が生まれ」（同前: 112）る可能性についても示唆している。語り手という他者を自己の中に「受け止める」、そして、受け止めた経験を表現するために試行錯誤し、そして実際に表現するというプロセス全体のうちに自己と他者の境界の溶解による自己変容と、より広く他者に向かって語り手の経験を開く契機が見いだされているのである。

ここで述べておかねばならないのは、石野の実践は実際に聞き取った本人が「聞きなぞり」を行うことによって生まれる可能性を論じているのであり、それはもちろん私たちが行っている実践とは異なっているという点である。しかしながら、「なぞる」という行為のうちに新たな可能性が見いだされているということを引き受けるのならば、そのバリエーションとして他者の経験を歌う、いわば「歌いなぞり」という実践を位置づけようとするのは、不可解なことではない。そのため、私は石野の実践を念頭に置きつつ、オーラル・ヒストリーの歌詞化という作業をおこなうことにした。では次に具体的にどのようなにして、女将の人柄や雰囲気を経験の中に落とし込んでいったのかを見ていくことにする。

「なぞる」ということを念頭に置いた歌詞制作をおこなうならば、女将という人の人柄や雰囲気を歌い手がなぞりやすいようにファシリテートできるような歌詞を制作しておく必要がある。というのも、歌い手に録音したインタビューを聞いてもらったり、書き起こしを読んでもらったりする

ことはある程度は可能だが、参加者に実際のレベルまでそれを要求できるのかは現時点では不確定要素だからだ。

たとえば、それぞれの連の最後に現れる「そうよ…」というフレーズや、センテンスの最後にところどころ現れる「の」という語に注目してほしい。これらは女将の口癖であると同時に女将の人柄の柔らかさを表すフレーズでもある。ただ単に「そういう街だった」、「大変な時代だった」と語りを短く提示してしまうよりも、女将の口癖を残す形で「そうよ…」という言葉のクッションがおかれることで、歌の聞き手はその後の語りについていつい耳を傾けたいくなる。そして、「の」という一語によって、語りの内容は私たちの耳に優しく置かれることになる。これらのフレーズが表しているのは、女将自身の息遣いや口調、人柄、纏っている雰囲気いわば女将という人の温度であり、年齢とともに刻まれてきた皺そのものであると私は考える。そして、歌詞にちりばめられたこれらのフレーズや語りが歌い手に想起させるのは、女将が語りを他者に語るときの語り方、態度である。つまりこの歌詞を歌う当人たちは女将に語りかけられると同時に女将になりきることができる。このような経験の共時性こそが、この歌詞で私が表現したかったことだ。

その人そのものをなぞりやすくする歌詞制作を行う際に、繊細にならなくてはならない注意点も、もちろんある。それは、オーラル・ヒストリーに基づいた歌詞制作が、あくまで代理表象である以上、私たち自身が持っている女将像が歌詞に反映されざるを得ないという点である。しかし、この点に関しては口癖や口調をそのまま採用することによってある程度は解消しうるし、また、作者名を明記することによって、歌詞が女将の語りから私たちが生み出したオルタナティブな表現であることを明示することが可能であると考えている。だが、人の生を作品化していく以上この点は今後も研究会で議論されていかねばならない。

再び議論を石野の示唆する「聞きなぞり」の可能性に議論を引き戻そ

う。語られた内容を他者が聞きなぞることで、「私的に閉じられがちな経験を開き、受け止めやすくする作用が生まれ」とするならば、「なぞる」という行為は「牛久商店街に生きる人々が《まちのきおく》を歌うことで、街の歴史が他者に開かれ、新しい息吹を吸い込みながら歌い継がれていく」という私たちのコンセプトと重要な結びつきを秘めているといえる。なぜならば街の歴史を他者に開くときに重要なのは、他者に耳を傾けてもらうことだからである。他者が街の歴史との間に距離を感じてしまえば、歌はその場限りのもので閉じてしまうだろう。それでは開かれてもいないし、歌い継がれていきもしない。これはあくまで仮説的な段階に過ぎないが、石野がいうようにある人の生きられた経験を他者へと伝達する可能性が「聞きなぞり」というパフォーマンスにあるとするならば、私たちが提案する「歌いなぞり」にもまた同様の効果が期待できるのではないかと考えられる。

繰り返しになるが、上述してきたような企画を通じて期待される効果は、現段階においてはあくまで推測に過ぎない。そのため、企画の諸段階における個別具体的なインタビュー調査を通じて「歌いなぞり」がその歌い手や聞き手、そして商店街にどのような影響を及ぼしていくのが今後明らかにされねばならないだろう。さらにいえば、歌詞制作という段階で意図したことが、歌曲化、歌唱という段階を経ることでさらに深まる可能性も十分に考えられるし、あるいは全く別の可能性をもたらすということも十分に考えられる。いずれにしても私たちが期待するのは、歌詞化され、歌曲化され、歌われる人々の生きた歴史が、私たちが想像もしないような様々なつながりを生み、牛久商店街に生きる人々や、そこを訪れる人々の生き生きとした表情を生み出すことである。アートミックスのコンセプトと共鳴しつつ、時にはそれを相対化しながら、今後の実践を行っていきたいと考えている。

4. おわりに

本報告では、ABR 研究会がアートミックスに提出したプロジェクトがどのようなプロセスを経て立ち上がったものなのか、そして、それがどのような手法や態度で進められているのかに主眼を置いて報告をおこなった。先にも強調したように、本プロジェクトにおいて見込まれる効果はあくまで推測の段階を出ないものである。人と街の生きてきた軌跡を聞き取り歌詞にする、それを歌にし、さらに歌うということが一体どういうことで、どういう意味をもつのかについての検討はこれからのプロジェクト遂行段階における重要な課題であるといえる。また、河崎氏の作り上げる楽曲が、私たちの作った歌詞や、もとになったオーラル・ヒストリーや語り手、さらには歌い手や聞き手との間にどのような反応を生み、どのような関係を築きうるのかについても全くの未知数だ。

しかしながら、一ついえることは、今まで聞き取られ、書かれるものであったオーラル・ヒストリーが、歌われるということ、その趣旨自体から今までとは異なる性質や効果が生じることはおそらく間違いのないことだろう、ということである。書くことから歌うことへの跳躍。書かれることから歌われることへの跳躍。その跳躍はあらたな記録の形を生むかもしれないし、あらたな記憶の形を生むのかもしれない。その生成の瞬間に立ち会い、記録し、記憶し、解釈すること、こういった作業がおこなわれることによって、これまでのアート作品とはちがう、もちろん社会学的な仕事ともちがう、何かが生まれるはずである。新たな現実の生成の瞬間を逃さずに引き受けること、それが ABR 研究会の仕事であるならば、アートミックスはまたとない研究の場となるだろう。本プロジェクトが直面するであろう種々の課題それ自体を一つの契機ととらえ、検討していく姿勢が私たちに求められている。

残念ながら、本稿において企画の採否を報告することは叶わなかった。だが、ABR 研究会はプロジェクト遂行に向け粛々と準備を進めているこ

とを記して本稿を閉じることとしたい。

注

- 1) 市役所に問い合わせたところ、どの地域が南市原であるという行政上の区分は存在しないが、南総地区及び加茂地区がいわゆる南市原と呼ばれているとの回答が得られた。
- 2) 「菜の花プレイヤーズ」という名称には、「「小さな花が集まって花を咲かせる菜の花のように、一人ひとりが主役であり、互いに力を合わせて花を咲かせたい。そして参加者自身が楽しんでプレイしたい」という思いが込められている」(北川他: 98)。
- 3) 現地見学会は2016年5月3日に開催。北川フラム氏の案内のもと「アートいちはら2016春」の会場を見学するツアーが開催された。ABR研究会からは高山、坪井の二名が参加。

参考文献

- 石野由香里 2015「他者の記憶を生き直す「聞きなぞり」の手法——高齢者のライフストーリーを演じ継ぐ——」『Social Design Review』7: 104-116.
- 北川フラム・中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス実行委員会 2014『中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス2014』中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス実行委員会。
- 「いちはらアート×ミックス2014」いちはらアート×ミックス ホームページ (2016年10月2日取得 <http://ichihara-artmix.jp/2014/>)
- 市原市「市原市人口ビジョン概要」市原市ホームページ (2016年10月2日取得 https://www.city.ichihara.chiba.jp/joho/keikaku/sousei/vision_strategy.html)
- 市原市「市原市人口ビジョン(分割版)」市原市ホームページ (2016年10月2日取得 https://www.city.ichihara.chiba.jp/joho/keikaku/sousei/vision_strategy.files/population_vision.pdf)
- 市原市「市原市緑の基本計画 2章 市原市都市特性及び緑の現状と課題」市原市ホームページ (2016年10月2日取得 http://www.city.ichihara.chiba.jp/kurashi/kankyoryokuka/ryokukasuisin/midori_keikaku/midori.files/02.pdf)
- 市原市「産業白書平成27年版」市原市ホームページ (2016年10月2日取得 http://www.city.ichihara.chiba.jp/kanko/0205sangyou/sangyo/_user_a180010a.html)

市原レポート

- 市原市「市の概要」市原市ホームページ（2016年10月2日取得 <http://www.city.ichihara.chiba.jp/joho/profile/sigaiyou.html>
- 市原市「中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックス 総括報告書」市原市ホームページ（2016年10月2日取得 <http://www.city.ichihara.chiba.jp/kanko/kankoannai/artmix.files/1soukatuhoukokusyozennbunn.pdf>）
- 市原市「年齢別人口統計（地域別）南総地区2006年8月」市原市ホームページ（2016年10月2日取得 https://www.city.ichihara.chiba.jp/joho/toukei/jinkou-top/nenreibetu_chikubetu.html）
- 市原市「年齢別人口統計（地域別）南総地区2016年8月」市原市ホームページ（2016年10月2日取得 https://www.city.ichihara.chiba.jp/joho/toukei/jinkou-top/nenreibetu_chikubetu.html）
- 市原市 市原市ホームページ（2016年10月2日取得 <http://www.city.ichihara.chiba.jp/>）
- 小湊鐵道 小湊鐵道ホームページ（2016年10月2日取得 <http://www.kominato.co.jp/>）